

Ludwig van Beethoven  
Symphony No.5 in C minor

HR  
Hyper-Resolution

Johann Strauss II  
“Die Fledermaus” Overture



Noriaki Kitamura  
The Slovak Philharmonic Orchestra

**<DISC 1> SACD/CD Hybrid Disc [Stereo / Multi-ch 4.0] NKB-105**

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven

交響曲 第5番 ハ短調「運命」 作品67

Symphonie Nr.5 c-moll op.67

- ① 第1楽章 Allegro con brio
- ② 第2楽章 Andante con moto
- ③ 第3楽章 Allegro
- ④ 第4楽章 Allegro

ヨハン・シュトラウスII世 Johann Strauss II

- ⑤ 喜歌劇「こうもり」序曲 作品362

“Die Fledermaus” Ouverture op.362

- ⑥ ワルツ「芸術家の生涯」 作品316

“Künstlerleben” Walzer op.316

**<DISC 2> DVD-ROM Disc NKB-405**

FLAC data (24bit/192kHz)

- ▶ Symphonie Nr.5 c-moll
- ▶ “Die Fledermaus” Ouverture
- ▶ “Künstlerleben” Walzer

DSF data (1bit/5.6MHz)

- ▶ “Die Fledermaus” Ouverture
- ▶ Symphonie Nr.5 c-moll IV Satz <One Point Stereo Mic.>

北村憲昭 指揮 スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団

Noriaki Kitamura / The Slovak Philharmonic Orchestra

《交響曲第5番ハ短調》作品67「運命」(ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン作曲、1807-08年)

交響曲第5番に直接関係する最も初期の着想が作曲家のスケッチ帳に書き留められたのは、第4番の作曲よりも前、1804年2月頃のこと。その後数年の中断を経て、1807年秋から本格的に作曲を開始、08年春に総譜が書き上げられた。初演は同年12月に交響曲第6番《田園》やその他の自作と共に行われ、翌09年4月にパート譜が出版された。総譜の出版は1826年のことである。

「運命」というタイトルは後世の人々が与えた俗称であり、《田園》や第3番《英雄》とは違って、作曲家自身に由来するものではない。また、これも第9番や《田園》とは違って、作品の中に内容を指し示すような言葉を見つけることもできない。実際に聞こえてくるのは楽器の音だけ、生演奏の場合でもそこに演奏者の姿と動きが加わるだけである。にもかかわらず、暗く激しい冒頭から、強烈な輝きを放つフィナーレにいたる一連の流れからは、苦難の克服、あるいは抑圧からの解放といったひとつながりの物語をイメージすることができる。これはベートーヴェンが第9番やオペラ《フィデリオ》でも取り組んだ重要な題材だったが、第5番では、それが言葉や演技を交えることなく、音の組み合わせだけによって表現されているのだ。

抽象的な音の組み合わせによって1つのストーリーを表現するために、第5番で徹底的に用いられ

ているのが、複数の主題を組み立てる材料として共通の動機を用いることによって、楽曲全体を覆う動機のネットワークを作り上げるという手法である。最も重要な動機として、2つを挙げることができるだろう。1つは言うまでもなく、一番最初に登場する、いわゆる「運命」の動機である。有名なりズム、下向きのメロディー、暗い短調の響きによって強い印象を与えるこの動機は、その後も4つの楽章すべてに姿を現し、この曲の暗い側面を代表する役割を果たす。そしてもう1つの重要な材料は、明るい長調の音階を順番に3つ上がる(シ-ドレ、ド-レミ、など)というもので、こちらはすぐにそれとはわかり難いほどに、入念に加工されているが、それぞれの楽章で、主に副次主題部に組み込まれて、繰り返し登場してくる。「希望」、あるいは「解放」や「救出」の動機と名づけることができそうだが、この第2の動機を通じて、第5番の暗い世界に、明るい光が差し込んでくる。この交響曲のストーリーは、「運命」の動機と、それに抵抗するもうひとつの動機の対決として読むことができるのだ。

以下に、2つの動機に注目して、全曲を構成する4つの楽章を概観しておこう：

第1楽章(ハ短調、アレグロ・コン・ブリオ(活発に、さらに活気を持って)、序奏を持たないソナタ形式)：「運命」の動機がほぼ全体を支配する。主要主題はほとんど「運命」の動機だけから作られており、びっしりと敷き詰められたその密度は、他に類を見ない。第2の動機は副次主題の中に織り込まれて現れ、解放を求めて繰り返し上を目指すが、その背後にも常に「運命」の動機が蠢いており、(未だ)どこ

にも逃げ場は無く、ついには「運命」の圧倒的な力によって抑え込まれてしまう。

第2楽章(変イ長調、アンダンテ・コン・モート(歩くくらいの速さで、動きを持って)、ソナタ形式の要素も持った変奏曲形式):2つの主題を使って構成される。主要主題では、舞曲風の動きの中で、解放に対する希望と不安が交錯する。これに対し副次主題部では、鼓舞するようなファンファーレが鳴り響き、将来の解放を約束する。3度にわたって現れるファンファーレによって、ためらいがちだった主要主題が次第に毅然とした雰囲気へと変わっていく。

第3楽章(アレグロ(活発に)、スケルツォとトリオ):暗い闇の中で苦しみ呻くかのような主要主題が、第1楽章よりもさらに威圧的な響きをまとった「運命」の動機によって、危うく押し潰されそうになる。だがそこへ突如、第2の動機がこれまでにない力強さと速さで割って入る。勇ましい戦いの場面とも聞こえるトリオが過ぎ去った後、主要主題は出口を見つけようとするが、やがて前も後ろもわからない闇の中を手探りで進むことになる。どこへ向かっているのか、そもそも出口があるのかさえわからないという不安の中を、それでも進んでいくと、突如光が差し、一気に前方が開け、曲は切れ目無く、第4楽章へと突入する。

第4楽章(アレグロ(活発に)、序奏を持たないソナタ形式):ここまでこの交響曲を支配していた暗く暴力的なハ短調の響きが、全く反対の、まばゆいばかりの輝きを放つハ長調に取って代われ、全ての葛藤が解決する壮大なフィナーレが展開される。第2の動機はもはやさえぎるものとして無く、力の限り上を

目指して疾走、いや飛翔していく。「運命」の動機すらも、ここではモーツァルトの「ジュピター」交響曲を連想させるような、勝利と歓喜の表現へと姿を変えている。ベートーヴェンはこの時代の交響曲としては異例の大編成をこの楽章のためだけに動員、それまでは主に教会や劇場、あるいは軍楽隊で用いられていた楽器(トロンボーン、ピッコロ、コントラファゴット)の追加によって、コンサートホールの舞台上に、野外の広場での祝祭の場面が描き出される。世界中が歓呼の叫びを上げるような輝きと大音響の中で、第5番は締めくくられるのである。

## オペレッタ《こうもり》作品362より(序曲)(ヨハン・シュトラウス2世作曲、1873-74年)

全3幕からなるオペレッタ《こうもり》は、1873年秋から翌74年初めにかけて、わずか6週間で一気に書き上げられ、74年4月に、ベートーヴェンが交響曲第5番を初演したのと同じ、アン・デア・ウィーン劇場で初演された。初演後短期間の内にヨーロッパ各地で大成功を収め、通常はオペレッタに門戸を開かない大劇場のレパトリーにも定位置を確保。現在に至るも、オペレッタというジャンルそのものの「代表作」の1つとしての地位は揺らぐことがない。

本アルバムに収録された序曲は、劇のあらすじをほぼ逆にとどりながら、本編の聴き所を予告していくように作られている。登場する主題は5つ:まず冒頭で提示されるはじけるような3音の動機は、第3幕で妻の浮気を知っていきり立つ主人公の歌から採られており、これが序曲の主要主題(A)を形作

る。第3幕からはさらに2つの、穏やかで、幾分か  
かうような感じのある主題(B、C)が現れる。続いて  
第2幕からは、徹夜の大舞踏会のクライマックスを  
飾るワルツの主題(D)が紹介され、そして第1幕か  
らは、大げさに嘆き悲しむ前半と小躍りするよう  
な後半の対比が笑いを誘う主題(E)が登場する。そ  
してこれらの間を、第2幕と第1幕でそれぞれ物語  
の転換点に現れる動機が橋渡しする。調性はこの間  
に、主調であるイ長調から5度上のホ長調に達し、  
そして主題が出揃った後は、主題Aを短く展開しな  
がら主調に戻ってくる。そして序曲の後半では、5つ  
の主題のうちCとD(ワルツ)が、ちょうどソナタ形式  
の再現部のように主調で回帰。最後は主題Aと主  
題Eの後半部分によって、駆け抜けるように締めく  
られる。

多彩な素材を用いながら、管弦楽曲としてのまと  
まりも堅持し、もちろん本編への期待を高める機能  
も十分に果たす——まさに傑作序曲である。

ところで、冒頭部における主要主題は、たとえば3  
つの強打というリズム動機、そのリズム動機の集積、  
さらに属音上での一時停止など、ベートーヴェンの  
第5番の第1楽章主要主題と、とてもよく似た姿を  
している。これは単なる連想に過ぎないが、もしかす  
ると、長年のコンサート活動を通じてモーツァルト、  
ベートーヴェンからヴェルディ、ワーグナーにまで  
至る芸術音楽の広範なレパートリーにも精通して  
いたシュトラウスは、同じく古典を聴き慣れた聴衆を  
相手に、ちょっとした知的ゲームを楽しんだのかも  
しれない。

## ワルツ《芸術家の生涯》作品316(ヨハン・シュト ラウス2世作曲、1867年)

題名の中の「Leben」について、日本では従来は  
「生涯」と訳されることが多かったが、シュトラウスの  
ワルツは、同姓の大家による巨大な交響詩などとは  
異なり、くつろいだ雰囲気を基調とする。むしろ、最  
近しばしば見られる「芸術家の生活」という訳の方  
が、曲の性格にはより似合っているように思われる。  
名作《美しく青きドナウ》(作品314、1867年)の次  
に作曲されたワルツで、ウィーンの芸術家たちが組  
織していた協会「ヘスペルス(宵の明星)」が主催し  
た舞踏会で初演され、舞踏会を運営した同協会の  
委員たちに献呈された。

楽曲は、序奏と5つの小ワルツ、それにコーダか  
ら構成されている。このメドレー風の形式は、父シュ  
トラウスの頃から一般的に用いられていた、ワルツ  
の基本的な形式だが、シュトラウスは、序奏部に現  
れる4つの動機をワルツ主部の各処に組み込むこ  
とで、楽曲全体を7つの小さなパーツの寄せ集めで  
はなく、1つの大きな統一体へとまとめあげている。  
それによって聴き手は、朝の雰囲気か漂う冒頭か  
ら、雄大な日没を思わせる結びまでを、あたかも芸  
術家のある1日の生活に立ち会っているかのよう  
に、1個の音楽作品として鑑賞することができるの  
だ。

踊りの伴奏という用途を完璧に満たしながら、単  
独での芸術作品としての鑑賞にも堪える品質の高  
さを実現する、シュトラウスの技の冴えを今に伝える  
佳作である。

(解説:白石 奏人)

## 北村恵昭 指揮者

1949年12月12日神戸に生まれる。父はアマチュアコーラスの指揮者、父方の伯父は1988年に亡くなるまでニューヨークで指揮を、母方の伯父もやはり大阪音楽大学の指揮科の名誉教授という一家の中で育った。

12才よりフルートを習いはじめ、京都市立芸術大学に入学、吉田雅夫 伊藤公一 各師に師事。大学卒業後指揮を日本の指揮者の第一人者山田一雄氏に師事し指揮法を学ぶ。

その後師のアシスタントを務めながら日本では数少ないオペラの経験を朝比奈隆氏のもとで積み、関西歌劇団指揮者として数多くのオペラのレパートリーを身に付けた。1981年ストラビンスキーの「エディプス王」を指揮し、デビューを果たす。

1991年桂三枝氏の演出によるモーツァルトの「魔笛」の公演で「斬新な演出にも劣らぬ伝統的かつ格調高い指揮であった。」と高く評された。1994年チェコのオロモウツで開かれた国立モラヴィアフィルハーモニー主催のマスタークラスに於いて、シューマンの「交響曲第四番ニ短調」の演奏に、最高の解釈であったとの特別表彰を受け、その榮譽として当オーケストラとシューマン交響曲第一番と第四番のCD録音を行う。

2011年よりスロバキア・フィルハーモニーとベートーヴェン交響曲全曲録音を開始。2013年2、9月

にワルシャワ・フィルハーモニーと「火の鳥」「海」等を録音。好評発売中。

論文「演奏の解析法」「旋律要素の解析」を執筆。著書に「音楽のマニュアル」「演奏のマニュアル」「合奏のマニュアル」「読譜のマニュアル」などがあり、これらは指揮者のホームページで見ることが出来る。

<http://homepage1.nifty.com/nma-yc/>

## スロバキア・フィルハーモニー管弦楽団 (スロバキア国立管弦楽団)

第2次世界大戦後の1949年、チェコスロバキア(当時)の東部スロバキア地方の首都で、オーストリアと国境を接するドナウ河畔の街、ブラティスラヴァに創立された、スロバキア最初の国立オーケストラ。初代首席指揮者は、チェコの伝説的な指揮者ヴァーツラフ・ターリヒ。このオーケストラの設立に尽力し、1949年の発足時から1952年まで首席指揮者を務め、1961年に亡くなるまでこのオーケストラへの指揮を重ね、短期間で第一級の水準に育成した。晩年のターリヒを補佐する形で、スロバキア出身のルドヴィート・ライテルが発足時から1976年まで指揮者を務めた。ターリヒの没した1961年からは、彼の愛弟子でブラティスラヴァ出身の名指揮者、ラディスラフ・スロヴァークが首席指揮者に就任。在任期間中の1980年には初来日を果たしている。「ブラハの春」音楽祭、「ブラハの秋」音楽祭(チェコ)、ブラティスラヴァ音楽祭(スロヴァキア)、

ウィーン芸術週間、ウィーン・モデルン、リンツ・ブルックナー音楽祭(オーストリア)、ベルリン音楽祭(ドイツ)、フィレンツェ五月祭(イタリア)といった著名国際的音楽祭への参加も多く、日本や全米、全欧への演奏旅行も頻繁に行っている。レコーディングも多く、スプラフォン(チェコ)、オーバス(スロバキア)、ナクソス(香港)といったレーベルから多数のディスクをリリースしている。チェコを代表するオー

ケストラがプラハのチェコ・フィルであれば、スロヴァキアでこれに匹敵するのがブラチスラヴァのスロバキア・フィルである。1980年の初来日以来、卓越したアンサンブルと力強い演奏、民族的な色彩感で高い評価を得ており、日本でも多数のファンを獲得している。

<http://www.filharm.sk/>

## Symphony No. 5 in C minor, op.67: “Fate” (Ludwig van Beethoven, 1807-08)

The earliest ideas for Beethoven’s Fifth Symphony were written in the composer’s sketchbook in about February 1804. After several intervening years, composition began in earnest in the autumn of 1807, and scoring was finished in the spring of 1808. It premiered in December 1808, along with the Sixth Symphony (“Pastoral”) and other works by the composer, and sheet music for the parts was published in 1809. The score for the symphony was published in 1826.

The title “Fate” is a nickname given by posterity and not by the composer himself, unlike the Third Symphony (“Eroica”) or “Pastoral.” Also, unlike the Ninth Symphony or “Pastoral,” the work does not include words that spell out the contents of the music. We can hear only the instruments, and at most can see the figures and the motion of the musicians in a live performance. However, we can imagine a coherent story, along with the progression of the music from the dark furious opening to the intensely brilliant finale, like the overcoming of hardship or liberation from oppression. These were important subjects for Beethoven, with which he also dealt in the Ninth or the opera *Fidelio*. In the Fifth the expression of these themes dispenses with words and theatrical drama, depending only on the combination of sounds.

To tell a story with an abstract combination of sounds, Beethoven’s Fifth makes exhaustive use of the technique of networking throughout the piece, employing recurring motifs as building blocks to construct multiple themes. In the symphony, two motifs can be called most important. One is, of course, the so-called “fate” motif, which makes a powerful impression with its famous rhythm, falling melody, and dark minor-key sound, appearing in all four movements and representing the dark side of this piece. Another is one with upward conjunct motion on the bright major scale (*ti-do-re*, or *do-re-mi* etc.) Because of its intricate elaboration, it is not easy to identify the second motif, but it can be found mainly in the subsidiary-theme sections of each of the four movements. Variably called the “Hope,” “Liberation,” or “Rescue” motif, this motif shines light into the dark world of the Fifth. The story of the symphony can be read as the confrontation between the “fate” motif and another that resists it.

Here is an outline of the four movements of the symphony, focusing on these two motifs:

### **First movement (C minor, *allegro con brio*; sonata form without introduction)**

The “fate” motif virtually rules over the movement. The principal theme is made up almost entirely of this motif, and the density of the spread is unparalleled. The second motif, woven into the subsidiary theme, repeatedly tries to ascend toward liberation. But the “fate” motif is everywhere in the movement, even in the background of the subsidiary theme. There is no escape for the second motif (yet), and at last



it is oppressed by the overwhelming force of the “fate” motif.

**Second movement (A flat major, *andante con moto*; variation also possessing features of the sonata form)**

This movement is constructed with two themes: while hope and anxiety for liberation are intricately woven into the principal-theme section, in the subsidiary-theme section, an encouraging fanfare rings out and promises liberation in the future. Through the three appearances of the fanfare, the principal theme changes its attitude step by step, from hesitant to resolute.

**Third movement (C minor, *allegro*; scherzo and trio)**

The principal theme, like moaning in the darkness, is nearly crushed by the “fate” motif, which sounds more coercive than in the first movement. But suddenly, the second motif thrusts itself between them with great force and speed, which have not been heard until this point. After the stirring battle-like trio, the principal theme tries to find the way out, but soon it gropes through directionless darkness. Anxious about the direction and whether there is even a way out at all, it nonetheless keeps groping, and suddenly the light shines, the way forward opens up in an instant, and the music rushes into the fourth movement without interruption.

**Fourth movement (C major, *allegro*; sonata form without introduction)**

The dark and violent sound of C minor, which has ruled over the entire symphony until this point, is replaced with the contrasting, brilliant C major, and the grand finale begins, in which the all conflicts are resolved. The second motif now frees itself from every restraint, and rushes or soars up with all its might. Even the “fate” motif changes its shape to a representation of victory and joy, and its new shape is reminiscent of the famous motif of Mozart’s “Jupiter” symphony. Beethoven called for an exceptionally large orchestra, compared with a typical symphony orchestra in his day, for this finale only. Through addition of instruments that were used mainly for church, theatre, or military bands in that era (trombones, piccolo and double bassoon), an outdoor celebration is portrayed on the stage of the concert hall. The Fifth Symphony comes to a climax in a brilliant and overwhelming wave of sound, as if the whole world were sending up a shout of joy.

**Overture to the operetta *Die Fledermaus*, op. 362 (Johann Strauss Jr., 1873-74)**

*Die Fledermaus* (The Bat), an operetta in three acts, was composed in only six weeks, from autumn 1873 through the beginning of the next year, and premiered in April 1874 at the Theater an der Wien, the same theatre in Vienna where Beethoven premiered his Fifth Symphony and other works. The operetta achieved great success soon after its premiere in various theatres in Europe, and got a regular position in

the repertoire of large opera houses, which normally did not open the door to operettas. To this day, it retains its status as one of the representative works of the genre.

The overture to the operetta, included in this album, announces key passages of the piece in advance, in nearly reverse order of appearance. Five themes appear: first, from Act 3, the bursting three-note motif of the hero who is enraged to know the fickleness of his wife, and the principal theme (A) of the overture is constructed from this motif. Two more themes from Act 3 appear (B, C), which have a tender and somewhat teasing attitude. Next, the theme of the waltz (D) from the climax of the all-night dance party in Act 2 is introduced, and then theme (E) appears from Act 1, and the contrast between the overblown grief of the first half and the cheerfully dancing latter half sets the listener to laughing. Motifs from turning points of the story in Acts 1 and 2 mediate between the themes. During the presentation of themes, the key shifts from the main key (A major) to the dominant (E major), and back to the main key through a brief development of the principal theme A. In the latter part of the overture, themes C and D return in the main key, just as in a recapitulation of sonata form. Finally the overture concludes with the rushing motion of theme A and the latter part of theme E.

The music uses a variety of elements but stays coherent as a single orchestral piece, and aptly satisfies the function of raising expectations for the operetta. It is an unquestionable masterpiece of the overture form.

Incidentally, the principal theme of the overture is formally quite similar to the principal theme of the first movement of Beethoven's Fifth Symphony, in the rhythmic motif of three strong blows, the accumulation of motifs, the pause on the dominant, and so forth. These are only mental associations, but Strauss, who was acquainted with the repertoire of classical music by composers such as Mozart, Beethoven, Verdi, and Wagner through years of concert activity, perhaps enjoyed playing a little intellectual game with audiences familiar with the classics.

### **Waltz *Künstlerleben* (Artist's Life), op. 316 (composed by Johann Strauss Jr., 1867)**

The word *Leben* in the title has traditionally been translated into Japanese as the "lifetime" of the artist. However, Strauss' waltz is pervaded by a relaxed atmosphere, in contrast to the mammoth symphonic poem by the great master of the same last name. The recently prevalent translation "daily life" more aptly represents this waltz. Strauss composed the waltz after writing the masterpiece *An der schönen, blauen Donau* (By the Beautiful Blue Danube) (op. 314, 1867). The waltz premiered at a ball held by the Vienna artists' association Hesperus, and was dedicated to the association's committee for management of the ball.

The piece is composed of an introduction, five small waltzes, and a coda. This medley-like form is the basic scheme for the waltz common since the days of the composer's father, but Strauss wove the seven pieces into one large integrated body, with a network of four motifs that appear in the introduction and various places in the main section. Thus, listeners can appreciate a musical work that extends from the beginning, evocative of early morning, to the ending, which suggests a grand sunset, as if they were witnessing a single day of the artist's life.

This is a superb work that conveys Strauss' mastery, perfectly fulfilling its role as a dance piece and at the same time well worthy of appreciation as pure art.

Kanato Shiraishi

## **Noriaki Kitamura conductor**

He was born in Kobe on December 12, 1949. His dead father was a conductor of amateur chorus. His uncle was also a conductor in New York. Another uncle is an emeritus professor of the conductor course of Osaka College Of Music. He was born and brought up in such surroundings. When he was 12 years old, he started to learn to play on a flute. He was admitted to Kyoto City University of Arts, and studied the flute under Professor M. Yoshida and Professor K. Itoh. After he graduated from the University, he learned to conduct under Mr. K. Yamada who was a prince of the Japanese classic conductor's world. Since then, as he served as assistant for free to Mr. Yamada at Kyoto Symphony Orchestra, he gained experience of opera under Mr. T. Asahina. He acquired a large repertoire of opera as a conductor of Kansai Opera. In 1981, he made his debut as a conductor. The repertoire was "Oedipus Rex" of Igor Stravinsky. His conducting and direction are so acclaimed. In 1991, he conducted "The Magic Flute" of W.A.Mozart. It was produced by Mr. S. Katsura, one of the famous Japanese professional comic storytellers. His conducting received a favorable review that it was traditional and elegant even though the stage direction was fresh. In 1994, he was given Diploma for the best interpretation of Robert Schumann's Symphony No.4 in d-minor. It was when "The third International Master class For Conductors" was opened by the Moravian Philharmonic Orchestra at Olomouc, Czech Republic. In 1997, he recorded Symphony No.1 and No.4 of Schumann with Moravian Philharmonic Orchestra. It was the especial glory for the Diploma. The CD was well received and more than 1000 discs were sold out. In 2010, he started to record all symphonies of Beethoven with the Slovak Philharmonic Orchestra. In 2013, he recorded "The Firebird" "La Mer" etc. with the Warsaw Philharmonic Orchestra. They are on sale, too.

So far as a lecturer, he has been appointed to several Universities, Kobe Yamate Women's Junior College, Kobe College Department of Music, etc. Then he has a conductor's master class and educates younger. As a scholar, he wrote reports, "Performance analysis by sound spectrogram" and "Elementary Phrasnet - Minimum Division of a Phrase and its Importance in a Performance -". Also he wrote books, "Manual of Music" "Manual of Ensemble" "Manual of musical Reading" "Manual of Performance" and "Manual of Direction". These can be read in Japanese at URL (<http://homepage1.nifty.com/nma-yc/>)

## The Slovak Philharmonic Orchestra

was founded in 1949. Two remarkable internationally acclaimed personalities, Václav Talich (Principal Conductor 1949-1952) and Ľudovít Rajter (1949-1976, until 1961 its Artistic Director) assisted at its birth. Other principal conductors that have played their part in the musical evolution of the orchestra include Tibor Frešo, Ladislav Slovák, Libor Pešek, Vladimír Verbickij, Bystrík Režucha and Aldo Ceccato. From 1991 to 2001 Ondrej Lenárd was Principal Conductor and Music Director of the Slovak Philharmonic Orchestra. In the 2003/2004 season Jiří Bělohlávek acted as Artistic Director. In 2004 Vladimír Válek became Principal Conductor. From 2007-2009 he was replaced by Peter Feranec and in 2009 the French conductor Emmanuel Villaume became the Chief Conductor. Simultaneously the conductor Leoš Svárovský has been Permanent Guest Conductor of the Slovak Philharmonic Orchestra since 2007 and from the 2011/2012 season also Rastislav Štúr.

Among the many guest conductors it is necessary to mention world-famous artists like Claudio Abbado, Hermann Abendroth, Petr Altrichter, Karel Ančerl, Serge Baudo, Roberto Benzi, Miltiades Caridis, Sergiu Celibidache, James Conlon, Oskar Danon, Christoph von Dohnányi, Vladimír Fedosejev, János Ferencsik, Mariss Jansons, Neeme Järvi, James Judd, Peter Keuschnig, Dmitry Kitajenko, Ken Ichiro Kobayashi, Kiril Kondrashin, Franz Konwitschny, Alain Lombard, Fabio Luisi, Jean Martinon, Kurt Masur, Sir Yehudi Menuhin, Riccardo Muti, Václav Neumann, Antonio Pedrotti, Alexander Rahbari, Karl Richter, Mario Rossi, Witold Rowicki, Kurt Sanderling, Sir Malcom Sargent, Peter Schreier, Václav Smetáček, Pinchas Steinberg, Otmar Suitner, Jevgenij Svetlanov, Ralf Weikert, Carlo Zecchi and others. Zdeněk Košler was awarded the title of honour of Honorary Principal Conductor in memorium. Numerous famous composers have also conducted their own compositions with the Slovak Philharmonic Orchestra, among others Krzysztof Penderecki and Aram Khachaturian.

The Slovak Philharmonic Orchestra regularly appears at music festivals all over Europe (Prague Spring, Prague Autumn, Bratislava Music Festival, Wiener Festwochen, Brucknerfest Linz, Carinthianer Sommer, Berliner Festtage, Festival de Strasbourg, Warszawska jesień, Athens Festival, Maggio Musicale Fiorentino and Sagra Musicale Umbra). During its numerous international tours, the Slovak Philharmonic Orchestra has performed in most European countries, Cyprus, Turkey, Japan, South Korea and the United States of America. The Slovak Philharmonic Orchestra has made a great many recordings for radio broadcasts, television and record companies, including Opus, Supraphon, Panton, Hungaroton, JVC Victor, RCA, Pacific Music, Naxos and Marco Polo. The Slovak Philharmonic Orchestra is a regular guest on important European stages and at foremost European festivals. As part of its numerous international

concert tours the orchestra has performed in most European countries, Cyprus, Turkey, Japan, South Korea and the USA. The Slovak Philharmonic has made a great many recordings for radio, television and for the record companies OPUS, Supraphon, Panton, Hungaroton, JVC Victor, RCA, Pacific Music, Naxos and Marco Polo.

During the 2013/2014 season the Slovak Philharmonic presented many interesting concerts both at home and as international guests abroad. They performed twice in Oman, once in January 2014 with the Vienna State Ballet and in March 2014 with the famous mezzosoprano Olga Borodina under the baton of Emmanuel Villaume. In March 2013 the Slovak Philharmonic Orchestra undertook a concert tour of five European countries – Switzerland, Austria, Germany, Belgium and the Czech Republic with the soloists Alena Baeva, Julian Steckel and Dalibor Karvay and the conductor Alexander Rahbari. Under the leadership of Ralf Weikert they prepared the opera Lohengrin by Richard Wagner and performed it at the „Richard Wagner Festival” in Wels, Austria. They ended off the season with festivals in Piešťany, Bratislava and Nove Zámky.

During the coming 2014/2015 season the Slovak Philharmonic Orchestra will once again appear at home in cooperation with outstanding guest conductors and soloists and at festivals in Switzerland like „Murten Classics” and the „Richard Wagner Festival”. They will close the season in July 2015 with a concert tour in Japan.

<http://www.filharmonia.sk/>



### 使用楽譜

Symphony No.5 in C minor / BREITKOPF & HÄRTEL URTEXT Nr. 5345

Recorded : Feb. 16-17 2013 : Slovak Philharmonic Hall, Bratislava, Slovak

Recording / Editing : mu-murakami

Mastering : Tomomi Aibara, winns-mastering.com <http://www.winns-mastering.com>

SACD Authoring : Hiromichi Aikawa, aiQualia Co. Ltd. <http://www.aiqualia.jp/>

Jacket design : Tatsuo Yamamoto

Special thanks : KORG INC.

HR Produce : mu-murakami, <http://www.mu-s.com>

Producer : Hiromi Kitagawa, NKB <http://www.nkb-ga.com>

**HR**  
*Hyper-Resolution*

NKB  
Record

aiQualia

**KORG**